
異界へ行こう！ 09'

叢雨式部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界へ行こう！ 09'

【Nコード】

N3354P

【作者名】

叢雨式部

【あらすじ】

ちよっぴり怖い？ 存分におバカ！ それはひと夏の、異界という名のど田舎探訪紀行。筆者の大学時代の実体験に脚色を（かなり）施した異例のセミフィクション小説となっております。実在する地名・人物・団体その他とは一切関係がない、かもしれません？

そうだ、異界へ行こう！

わたしの学校の友達の一部、上杉氏。人より若干背が高く、若干筋肉質で、若干目が細い。なんとも特徴をあらわす言葉に困る容姿だが、彼のキャラはそんなところでは立っていなかったりする。

それは何かと問われれば、たいして都会でもない地元と比較しても有り余るほどにもの凄く田舎から来ている、という一点のみ。無論はじめは、自己紹介の際に上杉氏のあまりの特徴のなさから、代替案としてあげられた特徴のひとつに過ぎなかった。

しかしそこは、地味に人々の流動が少ない陸の孤島という地元地域で、長年生活する中に培われた親近感ならではの、イヤ過ぎる連携プレーをみせるクラスメイトのこと。たちまちよってたかつて絶え間なき妄想を雪だるま式で膨れ上がらせていくのだった。

いい加減いじめと紙一重ともいえなくもないけど、それはともかく結局のところ、いつしか彼の故郷は、『異界』として語り継がれていったという。

常識では考えられない儀式を行う地元信仰があるとか、地図には載っていない幻の国がある（注…上杉氏はその王族）とか、ツチノコがいる（注…農場まである）とか、なぜかうニが特産（注…そこは完全に内陸）とか……。

とにかく、クラス内の旅行で行ってみたい場所ベスト1に堂々と名を載せる人気スポットだったのだ。だからといって、レクリエーションのアンケートで、満場一致でリクエストするのは甚だ迷惑だったのだが。

そしてあれは、そう、とある夏の日。陽射しがドライヤー熱風直

当てくらい暑苦しい中での出来事。まさに青天の霹靂。白昼夢。あまりの暑さにきつと狂ってしまったに違いない、わたしの友達斉藤ちゃんの、あの悪魔のような一言から、すべてが始まったのである。

「……そうだ、『異界』へ行こう！」

突然何を言い出すのかと、目を丸くする上杉氏。漫画の一場面の如くに飲んでいたコーラを少し吹き出し、むせるわたし。ただ一人、何事もなかったかのように平然とフライドポテトを食べる彼女は、友達の織田嬢。周りのテンションにも流されない不動の精神が、つややかな黒髪と同じく輝いておられますね。

ともかくにもこの長閑な真夏の昼下がり。緩く静かに平穩だったファーストフード店内に、突如として刹那の緊張が走り抜けた瞬間なのである。

「な、な、何を言い出すのかな……？ 斉藤よ」

「んー、なんとなく？」

「なんとなくでそんなことを言う危険極まりない口はそれか！ 訂正しなさい、今すぐ！ でないと裂くよ？ がま口にするよ？」

「ひひゃい、ひゃへへー！（注：痛い、やめてゝの意味）」

「とりあえず落ち着いて落ち着いて。ほら織田さんも何か言っ

「そうね。その発言の最後も、さり気なく危険よ上杉君……」

「誰がつっこみ希望を」

「成敗じゃー！！」

「ははふひは、いははー！（注…がま口は、嫌やゝの意味）」

予想通りというか、零コンマ数なんたら反応速度で斉藤ちゃんに掴みかかる上杉氏。散々ネタに使われた結果、異界というワードには鋭く察知する特殊能力でもついているのだろう。一方、見た目も中身もいじられキャラ満開である天真爛漫っ子の斉藤ちゃんは、いいようにがま口の刑を受けている。毎度のことでほんと懲りないというか、学習能力がないというか。

それに、なんとか宥めようと試みるわたし。が、正直この状況を解決する実力も、解決しようとする気力も持ち合わせてはいない。織田嬢もやけに冷静に、自己満足かつ無意味なつっこみを入れるだけ。相変わらず謎な人だ。

と、以上実況解説終わり。

その後、ようやくやる気をみせた織田嬢の仲裁でなんとかというほどでもなく、ほぼ予定調和にその場は収束。続いて斉藤ちゃんの、突発的な発言の懺悔をみんなで聞くこととあいたのである。

そして上杉氏に取調室の刑事風という無駄な演出を込めた嫌がらせを含む、執拗かもしれない責め立てを受けながら斉藤ちゃんが語ったことは、次の通り。

そもそも上杉氏の故郷が『異界』と膨れ上がり呼ばれるようになった所以の話なのだけど、ここ福岡県で最も有名な心霊スポットに、犬鳴峠というものがある。テレビの心霊番組でも度々紹介されて、絶大な人気を誇っている場所だった。

噂の大元は峠の中にある旧道の犬鳴トンネルだが、あまりに訪れる人が多いため、なかば副産物的に紹介された峠内のある電話ボックスでさえ、ついこの前わざわざ撤去されてしまったほどなのである。

そう、この最大級の心霊スポットである犬鳴峠のある場所こそ、我らが言う『異界』……ではない。散々期待を仰ぐような解説で恐縮だが、異界にあるのは有名な犬鳴トンネルではなくて、それにあやかるように人気を得ている心霊スポット、仲哀トンネルである。つまりところ、斉藤ちゃんは暑さから逃れるために肝試しよろしく心霊スポットバスターをしよう！ という発想を導き出したのだろう。

ちなみに彼の発言が突発的なのは、いつものことなので判断には含まれない。

ようするに一応、考えあって、と言えるだけの思慮に基づいての行動だったというわけ。

それだけで言い訳になるのかどうかは、考えるにも及ばないと思うけど。

「しかして上様、是非とも厳しきお言葉を……」

「いえいえいえいえなにとぞ、ご慈悲を……」

そして上杉氏と斉藤ちゃんが揃ってわたしに詰め寄る。なぜか時代劇風に。しかしなんだかんだ言いつつも、このぴったりと息の合

った二人の掛け合い、やっぱりなんだかな。仲のよろしいことです。この二人は将来吉本で漫才をやる気だと噂に聞く（注…所詮ただの噂）。…やるかも知れないんじゃないかと思う。

この二人は将来海外で結婚をする気だと噂に聞く（注…絶対ただの噂）。…やるやれないの問題じゃないよと思う。

さて。

「殿、ご決断を……」

思考がずれてわたしが時間を延ばしてしまった隙に、織田嬢までもが次第に便乗してくる。相変わらず、謎な上にそつなくさりげに自由な人だ。

どうでもいいけど、殿はないでしょう（注…上様もそうだけど）。せめて御局とか言って欲しかった（注…それはそれでいろいろ終わりそう）。

どうせ、絶対わざと言っているに違いない。逆手にとって、この話に乗れといっているのかも、という気がする……。

実際、わたしの携帯に『この掛け合いは誘われ攻め、お約束は遵守が吉』とか妙なメールが送信されてきたし。打ってたそぶりも見せないのに。

「……うむ、よきにはからえ。われらはこれより異界へ出陣する」

「……マジ？」×2

「……Good job」

こうして、なぜかいきなりここに、心霊スポットバスターズが結

成された。

隊員はムードメーカーの上杉氏、小動物的な斉藤ちゃん、わたし、そしてパーフェクトフリーダムな織田嬢の四人。

露骨に不安が漂うメンバーの行く手に待ち受けるものは、一体……。

続く。

衝撃、異界の実態？

再び暑い昼下がり、もといほぼ夜。

あの一日がわたしの運命を形付けてしまってから幾許かの時が過ぎ去り、正確にはわずか三日後。わたしと、わたしの他3名こと愉快な仲間達は、大変に大変に狭苦しい車内にて激しく激しく揺られていた。

そして只今この場所は、なんと彼の地『異界』のど真ん中だった。

本日午前十時より二時間半以上の道のりをかけて（注…一時間と四十五分くらいは迷っていた）到着してから滞在している、古いエアコンの振動音がやたらうるさ過ぎる上杉氏の家（注…噂では国主の屋敷）を脱出して、ほぼ陽の落ちかけた異界（注…見渡す限りの田園風景）を疾走しているのである。
その心は、

「いい加減、そろそろ外に行かない？」

とわたしがうっかり言ったらしいその言葉に、織田嬢が即座に返した、

『ひぐらしのなく頃に』

という時間指定によるものである。

どういうわけか、聞いて数秒で返信が来た。しかもメールで。わたしの発言を予測していたわけでないのなら、打ち始めの『ひ』だけで関連ワードの筆頭にその単語が来たのだろう。それはそれで、非常にどうかと思う。この自由人め。

そもそもわたし個人としては、そのまま家にいてもいいかなというつもりだったのだ。が、どうにもこの異界には娯楽がない模様。唯一ある娯楽だというのが競艇（注…の券売センター）という微妙さに加え、さらにこの時間帯で開いている店がコンビニだけ（注…異界にたった一つ）なのは致命的だろう。

それでどう考えても、家に留まっているのは土台無理な話、ということになってしまう。

ただ、実は織田嬢だけは、最初のほうは留まることも主張していた。でも、目的が上杉氏の家の宝物庫（注…ただの冷蔵庫）にある地酒であろうことは見え見えだったのだ。

目ざざというところは、出来る人なのかもしれない。けど、やっぱり見え見えだったのだ。わざとだろうけど。で、結局連れ出すことにした。

回想以上。そして、車内視点に戻る。

「隊長！ 今後のプランは、どのようなものなのでしょうか！」

「えっと……。とりあえず、まずコンビニで装備を整え、今後の作戦のブリーディング、その後時間を合わせて、ちゅーは……。じゃなくて、ちゅーあいトンネルへ突入なんだって」

あからさまに張り切った声で聞く隊員Aは上杉氏。わざとには違

いないけど、意外と楽しそう。それに鷹揚に答えようとして見事に失敗しているのが、わたしの不本意ながらも、隊長の斉藤ちゃんだ。

というか、ちゅーはって耐ハイですか。なんてベタなのですか。これだから天然って。しかもブリーディングではなくて、ブリーフィングです。ブリートって何ですか。ブリート？ アメリカ料理ですか。……そうですか。

「大袈裟ね。それで、お祓いとかはしないのですか？ ……隊長」

と、一応乗っておく、数の力に素直に流される純日本人なわたし。そして隊員Bらしい。ついでに言うとな織田嬢は隊員C、ではなく閣下とのことです。

それだけでもう、配役設定の仕掛け人がありと分かる。きっと閣下が階級ではないこともわざとなのだろう。

「あーねえ。それはほら、装備はバッチリだから」

「交通安全のお守り……それは自分への、挑戦ですかあああああ
！！」

「うるさいよ！ 危ないよ！ 前見てよ！」

別段驚くことではないが、上杉氏は車の運転が出来る。凸凹のあぜ道や強引な細道がほとんどである異界の中でそんなに便利なものでもない気がするが。

兼業農家である家の都合上、早くから覚えたのかもしれない。とあるが、織田嬢閣下のお言葉なので信用は厳禁、と付け加えておく。

そしてわたしはこの車に乗る少し前、車のボンネットの上でファ

ッションなのだとかさやかな抵抗を主張する、斜め四十五度に向けてつけられた初心者マークを、見逃さなかった。

心霊スポットの仲哀トンネルは、犬鳴トンネルと同じく旧道とされた山道の先にあるという。

なるほど、確かにいい装備だ……。

さて。異界といえど所詮小さなところなので、コンビニへはすぐに到着した。異界の中にあるコンビニということで、少しローカル性を期待していたのだが、特に何のことはなかった。それはそうだ。

ただ、多少店員の言葉遣いが怪しいのと、店の中を妙な羽虫が飛んでいるのと、窓ガラスにカエルがびったり張り付いているぐらいである。自由闊達な異界の風土がよく理解できる作り、ということだ。

これはわたし達に虫対策の必要性を提案してくれたということもあるし、よしとすべきなのかも。

「って、隊長。何故に駄菓子類を大量に買い込んでいるのでしょうか？」

「あ……。えっと、ほら……。遭難とかしたら大変でしょ？」

「してたまるかあああああ!!」

「うるさい隊員A。それに一理はある」

「か、閣下!？」

「なんと言っても異界、ということ?」

「隊員Bまで。……だゝもう、そんな手の込んだ芝居までして、我が故郷を批判したいか君たちは……」

「えーでも」

「それは、まあ」

「とりあえず、これを見なさい。上杉君」

逆に今までよくもったという感じだけど、とうとうネタもやめてわめく上杉氏。そして彼の前に、どこから持ってきたのか（注…『こんなこともあるのか』とだけメールが返ってきた）織田嬢が心霊特集の冊子を開いた。

それによると、この『異界』のあちこちが心霊スポットになっているらしい。トンネル、墓地、ダム、廃病院、廃学校……。

霊場というか、何というか、まさに『異界』といったところ、選り取りみどりだった。最後の二つは単純に過疎化が原因だけだ。

「立派に異界」

「……マジ？」

上杉氏にご愁傷様。合掌。

「完全無欠の真相真理、と書いてマジ」

いやそんな読まない。そして長い。

「……」

沈黙する上杉氏は放置して話を戻すと、仲哀トンネルはそこでも堂々のランキング1位とされていた。

これは、予想以上に危険なものとなるかもしれない……。全員の頭の中をそんな言葉がよぎったことだろう。いや、織田嬢だけは違いかもしれない。

その後買い込んだ装備（注：使い捨てカメラ等、懐中電灯は持参）を車に積み込んで、我々は静かに戦地へと出発するのだった。

続く。

実録、心霊スポットぼすたぁ♪(1)

車の中は、終始無言だった。あぁっ、でも嫌なブレーキ音がっ！
？

それがさっきの出来事によるものなのか、はたまたこの山道が予想外のテクニカルコースだったことによるものなのか、定かではない。あぁっ、今タイヤ滑った！？ まさかドリフト！？

どちらにしても、必死の形相でハンドルを握っている上杉氏を前にしては、気軽にしゃべらないほうが正解だとは思う。だからっ、なんでハイスピード！？ スピード狂！？ さっきまで普通だったのにー！！

「ふふ、ふふふふふ、ふははははははっ！ー！！」

「制限速度おおおお……」

そして猛チャージのテンションアップから、わたし達の心霊スポット探検譚の、始まり、始まり。

『無敵のーサイナー、フルスーロットルー♪』(注：着歌フル、誰の携帯とは言わない)

さて。ここは仲哀トンネルへ向かう途中、かつて『十三曲がり』と呼ばれし古の難所。道はとても車が走る道とは思えないほど、180度レベルのターンの連続で、山肌をのぼっていく。しかも、ガードレールのたぐいは一切ない。アスファルトもたまにボロボロ。というか廃道ですからね。

山道の下のはうへは春には花見が出来るということであって開けていたが、今はもう月を探すのも難しいほどに、木々のトンネル状態だった。あ、メール。

『月夜ばかりと思うなよ』

だから、それはもういいです織田嬢。強引だし。

でもまさかないとは思いますが、もしも対向車がやってきたら本当に危ないかもしれない。このハイスピードの場合バッグをするのも、横へよけるのも、初心者マークには……。またメール。

『スピード狂、その者えてして無駄な神業ドライビングスキルをその身に有し、無自覚に発揮せし者なり お約束語録』

果たして、それは現実世界で期待できるものなのだろうか。と、言ったそばから。

「うわ~~~~~~~~~~~~っ!!」

「ええ~~~~~~~~~~~~っ!!」

それは現実となった。

あまりに突然のことに、その瞬間はわたしもあまり覚えていない。

上杉氏が突然叫んだかと思うと、どうも同時に思いっきり急ブレーキをかけたらしい。

それから、コーヒークップを全力で回すかのような大回転。阿鼻叫喚の生き地獄となった。斉藤ちゃんの叫び声が聞こえた辺りで、もうわたしは意識を手放した。それから車の中にしばしの沈黙が訪れることになったのだ。

織田嬢も何か言っていたような気がするけど、ここは聞かなかつたことにする。ともかく、しばし。

「いたたた。一体何なの？ って、これ……」

やんわりと意識を戻し、身体の無事を確認する。よかった生きてる。次は状況を確認する。わたしは前のシートにぶつけた頭を上げて、運転席のほうへ身を乗り出した。

そこに衝撃の光景。次の瞬間私の目に飛び込んできたのは、フロントガラスのすぐ前にまで迫る大木だった……。

「うおおい！！ 崖崩れだ崖崩れー！ 車はここまでだな」

いつの間に車から降りたのか、いきなり上杉氏がドアを開けて入ってきた。

ハンドルはもう手放しているが、まだ少しハイになっているのか、声が大きい。それとも、現状の非日常性からか、声が大きい。とにかく声が大きくて、いきなりだった。

だから少しだけ、ほんの少しだけびっくりしたけれど、何か文句言いたいけれど……やっぱり黙っておこう。

結局のところ、この大木は多分今回の計画の少し前に大規模な集中豪雨があったので、そのせいで土砂崩れにでも巻き込まれて倒れ

たのだろう。もっとも計画の始動時にはすっかりやんでしまったので、良かったと思っていたのだけれど、まさかこんなところで阻まれるなんて。

「あとどれくらい距離があるの？　まあ、危険はつきものだよね」

齊藤ちゃんが助手席からたずねる。この先にもまだ崩れている箇所があるかもしれないし、歩いている途中に崩れるかもしれない。流石に命まで懸けるわけにはいかないのだ。冷静な見極め、これらもとても重要。上杉氏にハンドルを握らせたことで、既に誤ってる感過多だけど。

一瞬計画の断念を進言しようかと思っただけでも、隊長たる齊藤ちゃんの顔には不安はなく、そのまま車を降りていく。危険運転の咎もなかったかのように平然としている上杉氏、有史以前から変わらぬ太陽のようにまったく動じない織田嬢。どうやら、誰も堪えてないらしい。

仕方がない。所詮数の力に流される純日本人な……以下略。わたし達の、旅は続く。

「どう？　通れそう？」

「……うん、意外と見かけ倒しだね」

電灯など何もないため、ヘッドライトの向こうで懐中電灯の明かりが点のように見える。その点から、齊藤ちゃんの声変わりが目立たない高い声が聞こえた。

上杉氏がそれを聞いて車を路肩によける。わたしと織田嬢はそれ相

応の装備を整えた後、車の外へと降りた。

いざ、心霊スポットバスターズの出動である。……不安だ。

続く。

実録、心霊スポットばすたぁ♪(2)

結局は、恐れていたことはすべて起こったのだった。

と、しばし回想調に始まる。

目的の仲哀トンネルは意外となかなか距離があって、その途中何度も崖崩れの現場をわたし達は通りぬけた。予想以上の困難に全員目的地目前となる頃には、休憩を余儀なくされてしまっている。帰りも通ることを考えると、ちよつとつらい。

しかし、誰も戻ろうとはしなかった。さすが我ら、といたいところかは別として、現実はとても切実な理由だったりする。考えてみよう。明かりなどあるはずもない山道、しかも昼間でさえ不気味だったであろう山道、後ろを振り返ることすら勇気がいるというものだ。

そう、とっても怖い、正直……。

そして『誰がこんなことやろうって言ったのまったく』と責めることの無意味さまでわかっている悲しい現状では、もはや全員黙々と歩き続けるだけだった(注…歌とか歌うなんていうのは人のプライドが許さない、断じて)。

さらに幸いといっていいのか、と問うのは愚問に過ぎるけど、それなりに道すがら様々なイベントもあったのだった。というか、あっってしまったのだった……。

ほんとなくても良かったのに。

一つはお決まりというか、お約束というか、どこの心霊スポットにも大抵ありそうな朽ち果てた公衆トイレ。発見してしまった斉藤ちゃんは、後でこっそり織田嬢からサルミアッキ（注…世界一〇〇〇飴）が贈呈される。いつもいつもいつも余計なことを。

ただこのトイレ、朽ち果て具合が相当に酷いらしく、その場所へと向かう脇道さえ草に埋もれてしまっていた。

内部の確認と写真撮影は上杉氏がかって出てくれたが、戻ってきた彼の感想は、

『もう便器すらなかった』

というなんとも微妙なコメントだった。

ほんとすっごい微妙。

それをどう評価するかは自由に任せる、というかもうスルーとして。ここは後に聞いた話によると、過去に焼死体が発見されたとかで有名な場所だったらしい。……上杉氏の冥福を祈ろう。

もう一つはこんな場所に、私達以外にも道を歩く人がいたということ。まあ、確かに私達が車を止めた路肩にはもう一つ車があった。その車の人のだろう、多分。

だけど、よく考えてほしい。こんな場面で前方の闇から突然ふらつと現れれば、普通は誰でもびっくりするはず。断じて。懐中電灯持ってようが関係なく。断じて。

ついでにその懐中電灯の光を勝手に誤認して、

『あ、ひとだま!』

とか叫んだ斉藤ちゃんは、後でこっそり織田嬢からロシアンダーク99（注：世界一〇〇〇チョコ）が贈呈される。悪気がないなんてシラナイ。人は不条理で成長するものよ。迷惑甚だしい。

実際に、表情まで窺い知ることはできないけれど全員がその場で固まってしまっていた。寿命が縮まったかも知れない。外見も若くなればいいのに。それはともかく。

歩いてきたのは二人で、一人は黒いジャンパー姿の男の人。全身の配色が割と黒々。やや年配で、私達に気づかないかのようにうつむいたまま歩いて行ってしまった。

もう一人はさっきの人の隣を歩いていて、白いスーツ姿の女の人だった。実際この色は目立った。容姿は、長い髪が綺麗な人と記憶している。

すれ違い様に軽く頭を下げて会釈をした。もちろんそれには、わたし達も固まりつつ、ちゃんと会釈を返したのだった。

そして、時は今。

「あゝっ、ついた~~~~~!!」

「うわっ」

「えっ」

「……」

そしてついに仲哀トンネルへと到着した途端、斉藤ちゃんが突然大声で叫んだ。おかげで、わたし達（注…一名を除く）の驚きの声もまじった。もう、後でこっそり織田嬢からシュネッケン（注…世界一〇〇〇グミ）を贈呈させるから、ほんとにやめてほしい。

もう今度やったら、しかもトンネルの中でやったら、絶対シュールストレミング（注…世界一〇〇〇缶詰、今までの〇〇〇とは別）とか贈呈する。わたしがそんなことをひそかに宣言したところで、メールを受信。

『そんなくさいものは、ない』

織田嬢の意外な（注…失礼？）弱点を発見。

そんな騒動から溜息をつきつつ、小休止がてらわたしはその仲哀トンネルをあらためて見つめた。

「いかにもって感じね」

それが、わたしの素直な感想である。暗闇にぽっかりと穴を開ける仲哀トンネルは、どこをどう見ても、だれがどう見ても、立派な心霊スポットそのものだった。犬鳴トンネルにも全然ひけをとらないと思う。一説には超えるとも言うし。

「そうね、吸い込まれそう……」

織田嬢はそう表現した。その穴へと向けられた懐中電灯の光ですら、トンネルの向こう側の入り口を、照らしきれていなかった。か

なりの長さがあるのだろう。それに、やんわりと霧がかっているようにも見える。あの世からの瘴気とかじゃ、ないよね？ と、メル受信。

『少し肺に入った』

いや、腐海とか絶対違う。

「……よし、行くか」

と、少ししてあっさりと言うのは上杉氏。この出所の分からない無尽蔵の勇氣は一体どこから来るのか（注…まさか異界の王族の血？）。

たとえば何を考えていないただの筋肉バカだったとしても（注…多分そう）、わたしはこの点をプラスと評価することにしよう。と、何か微妙にずれたことを考えながらも、心拍が徐々に早鐘になるのを感じる。

とりあえず、上杉氏先頭に決定。

そしてわたし達は今、異界の深遠に足を踏み入れたのだ。

続く。

脅威、噂の仲哀トンネル☆

トンネルを少し進んだところで、上杉氏がさり気なくつぶやく。訂正。さり気ない口調だけど、無駄なリアクションでガチガチ鳴らされる歯の音がとても暑苦しい。

まあともかく、非常に分かりやすく、かつ適切な感想だったことだけは正しいと思う。

トンネルというよりは隧道と書いたほうがしっくりくるような、まさにハンドメイドな壁の仲哀トンネルの中は、驚くほどひんやりと冷たかったのだ。

もっとも、ガチガチ歯を鳴らすほどではないけど。

織田嬢の言う理屈では、鍾乳洞なんか夏涼しくて冬温かな理由と、一緒じゃないかっていうことらしい。

もっとも、歯を鳴らす上にくしゃみするほどではないけど。

まあ霊のいそうなところは気温が下がる、というのもあるかも知れない。でもわたしとしては外の暑苦しさから解放されて正直ラッキーってくらい。

もっとも、歯を鳴らす上にくしゃみした拳句、

「ちつくしーおりゃーべらぼーめーい！！」

とか言うほどではないけどっ！

「……あ、ちつくしーおりゃーべらぼーめーいて言っちゃった」

だからシツコイよ!!

『——とそんな冷えた空気でも、わたし達の周囲だけは冷めた空気になることもなく、前へと進むのであった』

……て突然何？ わたしじゃない。違う。言っていない。

はっ！？ 次の瞬間、振り向いたわたしの視線の先には、静かに微笑む織田嬢の姿が……。

おのれパーフェクトフリーダム。とうとうわたしの思考（注…地の文）まで出てきてボケは始めるなんて。ちよつと、さすがに、それはどうかと、

『冷えた空気と冷めた空気。今わたしはとても上手いことを言ったのではないだろうか、と一人悦に入るのであった』

て言ってるそばから、ああーもーストップストップ！！ これ以上やったら無理だから！ 破綻するから！ メタ、ダメ、ゼツタイ！

『もうこれはいっそのこと……ウワナニヲスルヤメr【強権発動！】
くあwse d r f t g y ふじこーp

（注…しばらくおまちください）

復帰。

ほんと調子にのりすぎです。さて。

もう結構歩いた気がするのだけど、たぶんトンネルの中腹辺り。複雑なでこぼこの壁は、わたし達の足音を不気味に反響している。相変わらず、あり過ぎるほどの雰囲気だった。

わたしはさっきから斉藤ちゃんと一緒にカシャカシャと撮影を続けているが、普通の壁の起伏だけで幾度となく心霊写真の人の顔やら何やらと間違えて、そのたびに心臓の縮む思いを繰り返している。人の目というものは存外にいい加減で、無意識にあれこれを人の顔みたいに認識してしまうものとかは、実際言い分けにしかならないと思う。全然現場では役に立たない。

「すごいな。明かりを消したら自分の手も見えん」

上杉氏はいまだにテンションに衰えが見えず、こんな調子で一人やたら大きな声で騒いでいた。もしかしたら怖さを紛らわしているのかも知れない、とか今更思ったのだけどうなのだろう？

声は普段から大きいし、騒がしいのも普段と変わらないのだけど……。や、無粋な推測は、この際しないでおう。

『同じ穴のムジナ』

メール、また！ ちょっと！

『ドングリの背比べ』

わかってます！ だから止めたし！

『五十歩百歩』

うう、正論だから手が出せない……。

でもやっぱり出す！

(注…しばらくおまちください)

復帰。

『月夜ばかりと思うなよ』

まさか棄て台詞をテンドンで返すなんて。ほんとに無駄な実力……。

そう、この中で余裕でノーリアクションなのは、織田嬢ただ一人なのだ。

と、その織田嬢の前に突然明かりがつけられた。そして、その明かりに照らされたのは……。

「織田っち、ばあ！」

「……そういう下らないギャグは、らしいけどやめなさいね」

「うぐっ、……ふ、ふあい（注：はいの意味）」

あと一応、ノーリアクションではないので触れなかったが、この天真爛漫少年斉藤ちゃんの場合、リアクションは恐怖とまったく反対の方向でオーバーしていたのだった。

心霊スポットの雰囲気としては多少不謹慎ではあるが、ともかくこんな調子で調査は進んでいった。また、トンネルが驚くほど長かったおかげか恐怖も最初のうちだけですみ、なんとか慣れてきたようだった。

それに、それなりに笑えるようなエピソードもあった。誰が捨てたのか、トンネルの中には、ところどころの隅にわけの分からないものが散乱しているのだ。

意味不明の機械部品、何かの服っぽいボロ布、ソファの欠片、カットされたダンボール……、なんかまさかだけど、ホームレスでも住んでたんじゃ……。

「うわっ、この雑誌古っ……」

上杉氏がそばの雑誌を持ち上げる。

「文字の読む方向が、逆だねえ」

と斉藤ちゃんがそれに無責任なコメント。

「……これで、日本兵の幽霊の噂も真実味を帯びてきたかもね」

案の定織田嬢が調子に乗る。

「って、そんなわけないでしょ。ただの装飾文字だって」

最後にわたしが手間かけて締めることになる。

と、そんな話題やらで会話も盛り上がりつつ、はじめの恐怖も薄れて少し退屈してきた頃、斉藤ちゃんが突如その会話を絶った。

「ねえ、あれってコウモリかなあ」

フラッシュで気づいたのだろうか。わたしはカメラを下げて懐中電灯を上へ向ける。トンネルに入って中程、さっきからやたら耳につく騒音の謎が、ここでもようやく明らかになった。

懐中電灯の明かりの中には、いかにもな黒い塊がひしめきあっていたのだ。

「おー、すごいな」

「……吸血？」

「いてたまるかい！ そんなもん」

「吸血コウモリ。翼手目、チスイコウモリ科チスイコウモリ。中南米生息、寝ている動物の皮膚を裂き血を舐め……」

「アンチヨコ見ながら言うんかい！ しかもさらっと中南米生息とか言ってるやん！」

「……ち、違うかー？」

「今更やー！ しかもパクリネタやー！ そしてなんで疑問系やー！」

「さて……」

上杉氏と斉藤ちゃんのコンビがまた漫才を始めていると（注…これが場所を選ばないというのか……）、織田嬢が退屈そうな溜息をついて、一人先へと進んでいく。気になったので、わたしが声をかけた。

「どうしたの？」

「コウモリっていうのは、出入り口からそう遠くないところにしかないから」

「……え？」

「出口が近いっていうこと。ほら」

懐中電灯に向けた先では、意外と近くに出口がみてとれた。同時に、ちよつとぬるい風が吹き込んでくる。

そう、まさしく出口に違いなかった。ついに、長かった恐怖の時間も、これでやっと……。と、思わず胸を撫で下ろすわたしの後ろから、突然大気を振わせんとするような大声がトンネル中に響きわたった。

「「うおおおっ！ 上杉 & 斉藤、行きまゝすっ！！」」

そして、予想通りの例の二人が、わたしの両側を駆け抜けて出口

へと疾走する。 またこの無駄な元気の塊（注…『元気玉』とかメール来たけど黙殺）は、まったく。

「想いだけでも〜！」

「力だけでも〜！」

分かる人にしか分からないような台詞を叫びながら、わたしと織田嬢を見向きもせず走り続けて小さくなっていく。取り残されても仕方がないので（注…決して怖かったわけではなく……）、わたしは織田嬢に声をかけて後についていくことにした。

「……漫才に使うなら、最後のものは伝わらないかもね」

「そういう問題なの？」

織田嬢の言葉に返事をしながらもわたしが心の中で、あれほどトンネル内では叫ばないでって言ったのに（注…実際には思ってただけ、伝わってない）、と駆け足な鼓動を必死に抑えつつ二人に猛抗議していたことは、この際秘密としておこう。……メール？

『まあ落ちつきな、カツ丼喰うか？』

や黙秘しますってば。

『法律上、代金はある持ちだがな』

どうでもいいってば。

と、そんなわけでなんとか無事にわたし達の心霊スポットバスタ

ーズは任務をまっとうした。出口を出た後に見えた星空はなかなかのもので、今回の報酬としてはわたしは結構満足だった。異界にもいいところはあるよね、うん。
勿論、ほんとうは心靈写真とかが報酬なのだけど、それはもう二次。

そして、トンネルを通り抜けた反対側の道は意外と開けた綺麗な道で、明らかにこっちから来れば歩かなくてもよかったことだけが、ちよつとだけ残念だった。

とはいえ苦労するからこそその後の幸せが大きいのであって、これもまあ、よしとしておこう。めでたしめでたし。

と、そんな爽やかなまとめも束の間だったりして、

「あ、うわぁ、これって……」

「え？ 何？ うっ、嘘でしょ!？」

その直後にこんな声が響いてたりする。

そう、それにしてもそれにしてもそれにしても、不満でしかたないのは、トンネルの出口一帯に広がっていた足元の泥に、泥に……。

「緊急事態発生ー！ 退避ー！ 退避ー！」

「あゝもう。 何でこうなるのよっ!！」

足元の泥に、まるでイカ墨スパの如くひしめき、うごめく……、

幾万匹もの『特大極太ミミズ』の大群であった！

「イヤ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つつっ!!」

続く。

まさか、これが真相。。。。

まるで異常気象のごとく最後の最後まで延々と灼熱の日々が続いた、この夏。平穏だったファーストフード店内から始まった一つの小さな物語は、再びその場所で終わりを告げようとしていた。

座る席も以前と変わらず（注：よくマークされてなかったと思う）、服装も大して変わらず、まるで以前の時に戻ってしまったかのよう（注：実際、なかったことにして戻したいと思う） 雰囲気の中。

しかしこの四人の一带はまたしても、突如として刹那の緊張が走り抜けていたりするのだった……。

「と、突然何を言い出すのかな？ 斉藤よ」

やがて沈黙をのっさり断ち切るように、上杉氏が尋ねる。

「だって、撮れちゃったんだもん」

「い、いや。撮れちゃったって」

しかし天真爛漫斉藤ちゃんは、まったく意に介せずはきはきと応える。と、もう一人まったく意に介せない織田嬢が話を引き継いだ。

「いいじゃない、別に。見せてご覧なさいよ」

別にここへ集められたわけでもなく、自然の成り行きで入店した昼食の席上なのである。よって目的は昼食なのである。

まさかここで、再び斉藤ちゃんの突発的な爆弾発言を受けてしまうとは思わなかった。完全に全員が油断していた瞬間だったのだ。

しかしまったくもって斉藤ちゃんは悪びれた様子も見せない。そもそも、普通昼食の席上でする話ではないだろう。とくにあの最後の悲劇、わたしがイカ墨スパを克服するためにどれだけ苦労したと思っているのか。

そして悲しくも、そういう無言の猛抗議は、やっぱりというかまったく意味を成さなかった。わたしを除く三人はそういう考えは一切なかったらしく、斉藤ちゃんの出した一枚の写真をとりかこんで真剣に眺めている。わたしも仕方がないので、心の中で涙を流しつつ、その輪の中に加わることにした。

「これは……、トンネルに行く前のね」

「暗いなあ、ちゃんとフラッシュたいたのか？」

「えっと、失敗したかも」

織田嬢が珍しく真面目にコメントしているのに、この二人が口を開くと見事に脱線する……。たしかに、わたしも暗いなと思ったけども。問題はそうじゃなくて。

「って、そうじゃないでしょ。これのどこが心靈写真なの？」

斉藤ちゃんが見せてくれた写真は、夜道がまっすぐ奥にむかって伸びている何の変哲もない一枚だった。と、わたしの問いに対して、斉藤ちゃんは写真の真ん中付近からちょっと右、道の端を指差す。まわりも暗いので分かりにくいけど、その部分は確かに人のような影っぽいのが写っていた。

「あーあれだ。ほら、行く時すれ違ったやつだよ、これ」

「そうね。黒っぽい服だったから見えにくいけど、確かにそうだわ」

上杉氏とわたしが揃ってつつこむ。微妙に早口になりつつ。しかし必死さがこもった否定を斉藤ちゃんは、

「うん、そう」

あっさり肯定する。え、逆に？ それ以外に問題が？ 手強い……。でも負けない！

「でも、それだけよね。実際に人だったんだから、なにもおかしいことはないでしょ？」

「えっとね、その……」

意外な展開に戸惑いつつ、わたしはさらに問題のないことを強引に確定させようとする。事なかれ主義万歳。

「……なるほどね」

続けて織田嬢が写真に手を添えて、そう一言呟いた。何かに気づ

いたらしいということをわたしと上杉氏は察して、その後の台詞に耳を傾ける。

織田嬢の言葉は、一筋縄ではいかない。じっくり聞いて、慎重に手を打たねば。そう、わたしと上杉氏の視線が合って頷きあったかは、定かではない。

しかしその言葉に、二人同時にはっとなった。

「つまり、何かが写ってるんじゃない。写ってるはずのが写ってないのよ」

「……あっ」

「おおっ!!」

そう、良く考えてほしい。途中ですれ違ったのは、一人じゃなかったということに……。白っぽい服で髪の毛の長い、綺麗な女性。この女性が写真にはまったく写ってなかったのだ。

「……ほ、ほら、一人だけ先に行っちゃったとか」

「うーん、撮る時は見えてたんだけど」

「誤作動とかだろ」

「同じのが時間差で数枚あったりするんだけど」

「……」

否定できそうでもないけど、確証は全然ない。この小さな物語が残した小さな謎は、真相は闇の中っていうことで落ち着いた。とくにお焚き上げとかはしなくてもいいでしょ、という織田嬢の言葉だけが救いである。そしてわたし達は何事もなかったかのように食事を終え、ファーストフード店を後にした。

とりあえず、またここに来るのは、やめておこう。そんなことを考えながら……。

完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3354p/>

異界へ行こう！ 09'

2010年12月6日04時39分発行